デジタル化で広がる安心「よろず相談所」薬局の今

新型コロナウイルス感染症の流行で急速に進んだのが、オンラインでの診療や服薬指導といった医療のデジタル化です。情報通信技術（ICT）の発展は、薬局や薬剤師の役割をどう変えるでしょうか。10月17日～23日の「薬と健康の週間」（主催・厚生労働省、日本薬剤師会など）に合わせ、日本薬剤師会常務理事の原口亨さんに解説していただきました。

窓口でも家でもお薬のアドバイス

医療はデジタル化がなかなか進んでいない分野でした。患者さんの様子を目でチェックし、聞き取りをするには「対面」が最も有効ですし、医療機関や薬局と同時に患者さんの側でも必要な機器をそろえなければならなかったからです。個人情報を扱う関係上、セキュリティーの問題もありました。

ですが、コロナ禍で肝心の対面が思うようにできなくなり、機会の提供を維持するために、パソコンやタブレット端末、スマートフォン越しに問診したり薬の説明をしたりする行為が公的医療保険でできるようになりました。最初は初診を認めないなど限定的な解禁でしたが、やってみると医療アクセスが悪い地域などの住民のニーズが高いことも分かり、対象は広がっていきました。

日本薬剤師会では、オンラインを活用する上での要点をまとめた「eラーニング」のコンテンツを作り、全国の薬剤師に見ていただきました。強調したのは、状況が十分に把握できない場合はすぐに患者さんを訪問し、対面対応に切り替えましょうということ。最近の医薬品は、吸入など独自の器具を使うタイプも増えており、患者さんの使い方などの理解があやふやなままではお渡しすることができません。実際に私自身も患者さんに問題なく説明しお渡しできるようオンライン服薬指導の練習をしました。

自宅にいる患者さんと話すと、薬局に来ていただくより把握しやすい点も多いことが分かりました。例えば「飲み残しの薬が少しある」と聞いた時、数量や保管状況を画面越しに見せてもらうことができるのです。自分の生活リズムに合わせて指導を受けられるので、患者さんのメリットも大きいと思います。

もっと便利に安全に電子処方箋への期待

今年1月からは、医療機関と薬局が処方や調剤する薬の情報をオンラインでやり取りする「電子処方箋」の運用が始まりました。患者さんは医療機関が発行した紙の処方箋を薬局に持って行く必要がなくなります。まだシステムに対応していない施設もありますが、これから徐々に広がっていくことでしょう。

データの電子化によって、患者さんの同意があれば過去の処方や調剤の履歴も参照できるので、既に服用されている薬と重複するリスクが減り、手持ちの薬との相互作用（飲み合わせ）もチェックしやすくなります。最近は薬局が処方箋に書かれた薬と成分は同一だが名前やメーカーが異なり自己負担の少ないジェネリック薬（後発医薬品）をお渡しするケースも多いのですが、それもリアルタイムで医師や医療機関に伝えられます。

マイナンバーカードをお持ちの患者さんなら、「ポータルサイト（マイナポータル）」で受診した日、処方された薬、自己負担額などの一覧をご自身で確認できます。より安心で安全な医薬品使用につながるはずです。

日本薬剤師会 常務理事
原口 亨さん

アプリで相談も!? 進化する電子お薬手帳

ただ、この仕組みにも弱点があります。履歴が過去数年（現在は3年）しか残らず、さらに処方箋なしで買える一般用医薬品（市販薬）のデータは反映されません。

これを補完するのが「お薬手帳」です。日本薬剤師会はスマートフォンなどで使える「電子お薬手帳」の最新バージョンを、7月に公開しました。無料でアプリをダウンロードできます。

最新版はパッケージのバーコードを読み込んだり、写真を撮って記録したりすることで、簡単に自分で買った市販薬の情報も登録できます。また年度内にも、アプリを通して薬剤師にオンライン相談できる機能を付ける予定です。将来は市販薬を使う際に、処方された薬との相互作用を人工知能（AI）がチェックするといったシステムの搭載もできればと考えています。いろいろな技術を積極的に取り込み活用することで、安心して服薬できる環境が整っていくのではと考えています。

電子お薬手帳は、災害で避難生活を余儀なくされた場合、あるいは入院せず自宅での療養を希望される場合などは、とても役に立つツールになります。現在では、日本薬剤師会の電子お薬手帳だけではなく、さまざまな機能が付いた製品もありますので、かかりつけの薬剤師や薬局にご相談いただき、スマートフォンにダウンロードして活用されることをお勧めします。

もちろん、薬局が健康に関する地域の「よろず相談所」であり、薬剤師は「街の科学者」であるという役割は、今後も変わりません。「処方箋がないと入りづらい」という薬局から脱却し、地域の皆さんと寄り添う薬局になれるよう活動を進めています。テクノロジーの進歩とともに多様化するニーズに応えつつ、患者さんとのリアルな関係性も高めていく。それがICT化の進んだ薬局のあるべき姿だと考えています。

カンタン！ 安心！
スマホでおくすり管理

日本薬剤師会は7月、無料スマホアプリ「eお薬手帳3.0」の提供を始めた。紙のお薬手帳と同じように、処方されたり自分で買ったりした薬を記録しておけるほか、電子版ならではの機能も満載だ。

その一つが、よく利用する薬局の「お気に入り登録」。こうすると医療機関で処方箋を受け取った時、その画像や印字された二次元コードを読み取って送信ボタンを押しておけば、その薬局で待ち時間を少なく薬を受け取れる。調剤された薬は自動で手帳に記載されるため、入力の手間も省ける。

カレンダーも付いており、服薬のスケジュールを設定しておくと、アラームで時間を知らせてくれる。今後は、薬剤師にオンラインで相談できる機能なども加わる予定だ。

家族全員分を一つのアプリで管理でき、旧バージョンからのデータ引き継ぎも可能。下記の二次元コードからダウンロードできる。

詳細は 日本薬剤師会 特設サイト
https://www.nichiyaku.or.jp/e-okusuri3/

PR 企画・制作／毎日新聞社営業総本部